

～看護職連携構築モデル事業の取り組み～

情緒ある景色で知られる能登半島だが、高齢化や過疎化が顕著だ。一方で看護職は、能登地域独自に看護研究・発表のための学会を設けるなど、頼もしい活動が光る地域でもある。

患者さんを待つだけでなく外へ

能登半島中部の七尾市にある公立能登総合病院は、430床超を有し3次救急を担う。地域には高齢者や認知症の人が多く、「地域の公立病院として、来院を待つだけでなく、街へ出て予防的な活動ができないだろうかと考えていた」と副院長兼看護部長の上野谷優子さんは話す。

石川県看護協会でも、近年は地域包括ケアシステム構築の支援や看看・多職種連携に力を入れてきた。その一環として2016年度、日本看護協会の「看護職連携構築モデル事業」に参加するにあたり、能登総合病院の試みに弾みをつけたいとの思いもあり、同院がある能登中部地



区支部と同北部地区支部を対象に選んだ。

受託が決まったころ、同院では市内の公共施設内に常設の「まちの保健室」を開けないかと考えていた。県看護協会でサポートに当たった青木範子専務理事は、予防や健康増進の取り組みには行政との連携が必須と、上野谷さんらと県の保健福祉センター、七尾市の健康推進課に相談を持ち掛けた。公共施設の使用はかなわなかったが、市の保健師らとの交流が生まれた。

その後、企画を練り直す中で、市民のニーズを確認しようと、「まちの保健室」の開催場所などに関するアンケートを取ったところ、自宅近くの公民館や集会所を望む回答が多かった。「商業施設や役所など、人が集まる所が良いと考えていたが、意外だった」と看護部副部長の坂本早苗さん。ちょうど、市との話し合いでも進展があった。市内42の町会ごとにある「いきいき健康クラブ」の取り組みが紹介され、坂本さんらは市の保健師と見学に出掛けた。

病院と行政の連携で「出前保健室」誕生

「いきいき健康クラブ」とは、集会所などに高齢者が集まり、体操や健康相談、医療職の講話を聞いたりするもの。見学した日は、市嘱託の看護師が血圧測定や健康相談に乗っていたが、人手が十分でないという。これを聞き、アイデアが浮かんだ。「私たちが『いきいき健康クラブ』に向いてはどうかしらう」。アンケートでの市民の意向にも沿い、打ってつけた。市の反応も良く、「出前保健室」と名付けられた両者の連携の構想がまとまった。

実際に「出前保健室」が始まったのはことし6月から。9月までの4カ月間で、6カ所・約60人に実施し、「別のテーマも聞きたい」「家族にも教える」など好評だ。認知症予防、自宅でできる運動など7つのメニューから、住民に選択してもらう。健診や指導、相談に当たるのは、主に専門看護師、認定看護師など専門性の高い看護職だ。「看護の専門性を知ってもらいたいし、職員のモチベーションも上がる」と上野谷さん。



院内の理解もあり、申し込み窓口や広報は事務部門が担う。市も町会や市民団体に周知してくれた。県看護協会も、医師会などと持ち回りで担当するラジオ番組で紹介するなど、看護職の活動アピールに最適と捉え、拡散に努める。

また昨年秋、取り組みの過程を地区支部の会議で発表したところ、参加者の意識変容にもなった。今夏の同会議では、地域の資源を知り連携推進を図ろうと、介護施設や訪問看護ステーションの強みや特徴を紹介し合った。さらに、17年度は小松地区がモデル事業を受託するなど、県内を挙げて看看連携が進んでいる。

また昨年秋、取り組みの過程を地区支部の会議で発表したところ、参加者の意識変容にもなった。今夏の同会議では、地域の資源を知り連携推進を図ろうと、介護施設や訪問看護ステーションの強みや特徴を紹介し合った。さらに、17年度は小松地区がモデル事業を受託するなど、県内を挙げて看看連携が進んでいる。

◀写真左：「出前保健室」の様子。フットケアのポイントを見やすくボードにまとめて説明中
▲写真上：PRを兼ね、ステッカーを張った車で出前に出掛ける。右から坂本さんと上野谷さん